

## DESIGN WORKS

笠岡諸島旅客船ターミナル「みなとこばなし」  
ロゴマーク、サインデザイン

### 公共施設に、「なんかええ」デザインを。

—— 人の潜在的な感性や想像力の最大公約数を導く ——

田中雄一郎／ブランディングディレクター、グラフィックデザイナー

ロゴマーク



笠岡諸島旅客船ターミナル

みなとこばなし  
MINATO KOBANASHI



岡山県の南西部に位置する笠岡市に今年3月に完成した、本土と沖合の瀬戸内海に浮かぶ笠岡諸島を結ぶ旅客船のターミナル「笠岡諸島旅客船ターミナル「みなとこばなし」(施主：笠岡市)」のロゴマークとサインデザインを担当した。笠岡諸島は大小31の島々からなり、その内の高島、白石島、北木島、真鍋島、大飛島、小飛島、六島の7島が有人島で、近年は県外や海外からの観光客も多い。ゆえにこのターミナルは子供からお年寄り、島民、市民、観光客など幅広くたくさんの人が利用する公共性の高い施設であるため、特定の層だけにしかわからないような偏ったデザインは避け、できるだけ多くの人に受け入れられるデザインにする義務があると言っても過言ではない。

ロゴマークは建物の特徴でもあるメイン棟の三角屋根である8寸勾配をモチーフにした。建物の特徴をシンボルとして表現することで、島民、市民、観光客が建物をイメージしやすくなり、認知度向上につながる。また8寸勾配の三角形を並べることで、笠岡諸島に浮かぶ有人島7島を表現し、

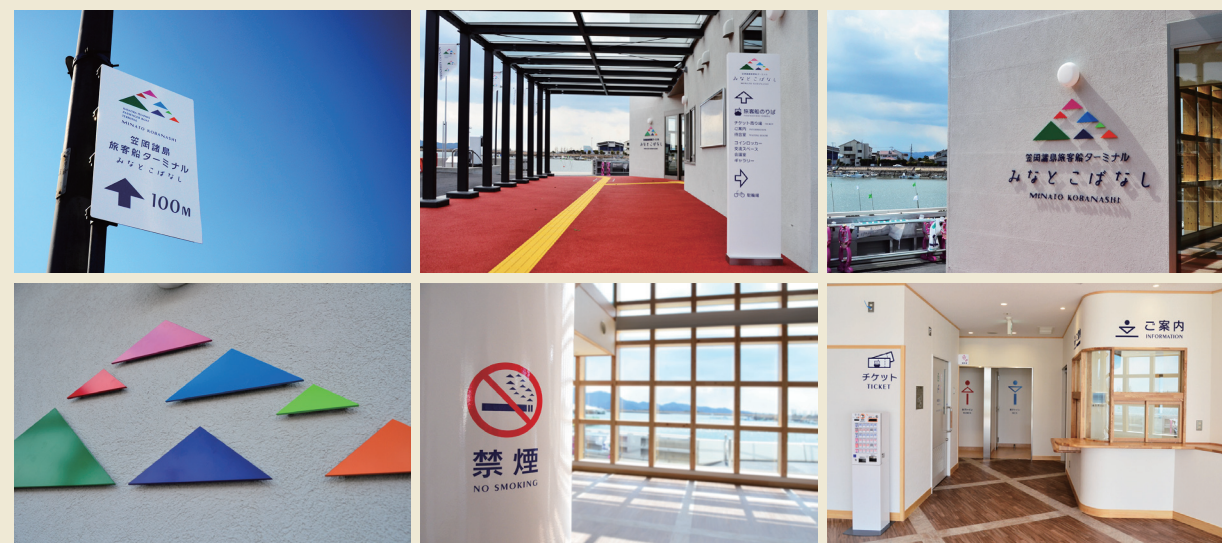


現在公共団体から発注されている入札案件に「デザイン業務」という項目はほとんどの所で存在していない。岡山県でも公開している入札案件では「印刷物(製本)」としての発注であり、デザインは実質その中に含まれている工程の一つである。つまり目的ではなく手段の一つとして捉えられているに過ぎない。

また入札は最低価格を提示した業者が落札するので、質は二の次で当然期待できない。我々の血税から支払われることを考えれば安かろう悪かろうでは到底納得できない。多くの人が目にする公共の発信物にこそセンスがあり、わかりやすく、読みたくなる価値あるものを創る義務があるのではないだろうか？

そのためにはセンスを概念化すべく、有識者や実績のあるデザイナーで構成される「デザイン監査委員会」を創設する必要があり、そこでウェブや広報物などビジュアル全般に対してデザインの質や費用対効果を検討した上で、適正な費用や方向性を示し、それを実現できる業者が受注できる仕組みに変えるべきである。

もっとも「くまもとアートポリス」のように建築や都市計画を通して文化の向上を図ろうというコンセプトの下、設計者の選定について建築コミッショナー(現在は建築家・伊東豊雄氏)に全権が与えられるという特種な制度と同様なことができれば、それに勝るものはない。



サインデザイン



島々を結ぶ港としてのアイデンティティを確立させ、笠岡の新しい玄関口であることを印象づける。カラーを7色使用することで、人の集まりや楽しさを表現し、名称の通り「小話」があちらこちらに溢れるターミナルを目指す。さらにターミナル内のサイン、ピクトグラムにもシンボルの8寸勾配のフォルムを展開することで、より強固なアイデンティティを確立させたい。

公共性の高い施設には奇抜で、かっこいいデザインが必ずしも求められる訳ではない。新しい価値を提供する必要はあるが、永く使用でき、わかりやすく愛着の持てるデザインが求められる。そのためにはたくさんの人々の心の中に通底する、今回の場合で言えば8寸勾配屋根であったり、島々であったり、潜在的な感性や想像力の最大公約数の要素を導き、図案化する必要がある。

ロゴマークは笠岡市副市長さんをはじめ関係者の方々に好評のようだ。先日ターミナル周辺で地元の年配の方に「わしゃあ、デザインの難しいことはようわからんけど、このマークはなんかええなあ。色合いがええ。」と言われた。この「難しいことはわからないけど、なんかええ」という下りがポイントであり、公共のデザインに必要な指標かもしれない。デザインは理屈や論理ではなく、ましてや数値で計れるものではない。一方デザイナーのためのデザインであってならない。今までデザインに感心のなかった田舎のおじちゃん、おばちゃんに「なんかええなあ」と感じてもらえるデザインこそ、地方創生を謳うこれらの日本には必要なかもしれない。同じ日本の中で基本的に都会も田舎も、人の感性にそう差異はないのだから。

今回ターミナル建築の現場監督を務めた蜂谷真一氏(株式会社荒木組)からの推薦で、サイン事業の一部としてプロジェクトに参加することになった。建物には魂とも言えるきっちりとしたロゴマークとわかりやすく親しまれるサインが必要だからと、私に白羽の矢が立ったのだ。先述の通り、公共団体からデザイナーに「デザイン業務」を発注されることはほとんどない。しかし公共施設に数多く携わる機会があり、デザインに対する理解と高い意識のある方が先導してくれれば、「なんかええなあ」と思えるインフラがたくさん街の中にできるのではないだろうか？我々の血税を財源とする公共施設だからこそ、デザインというフィルターを通して利用者に永く親しまれる施設を創ってもらいたい。



AD・D / 田中雄一郎  
PL / 蜂谷真一(荒木組)  
建築施工 / 荒木組  
基本設計 / 岡山県立大学  
実施設計 / 丸川建築設計事務所  
サイン施工 / オカカン  
DF / QUA DESIGN style

田中雄一郎 / Yuichiro Tanaka  
QUA DESIGN style (クオデザインスタイル) 代表  
www.quadesign-style.com

1975年岡山市生まれ。立命館大学理工学部卒業後、都市計画コンサルタントを経て、2004年妻・園子とともにQUA DESIGN style(クオデザインスタイル)設立。同時にデザインを独学。現在岡山を拠点に活動し、企業、店舗、農圃、医療施設、美術展などのブランディングデザインを中心に手掛ける。主な仕事に岡山大学のコミュニケーションシンボルデザイン&VI、福武教育文化振興財団のCI、ルネスホールのVI、まび記念病院のIII、岡山後楽園バスの総合デザインなど。2015年4月渋谷ヒカリエ・d7 MUSEUMで開催されたナガオカケンメイ氏プロデュース「NIPPONの47人」2015 GRAPHIC DESIGN」展に岡山県代表として選出。また国立台湾科技大学で開催された「2016漢字デザインビエンナーレ」に招待作家として出品。東京TDC賞Prize Nominee、JAGDA賞ノミネート。ほか東京ADC、SDA、APAアワード、世界ポスターリエンナーレトヤマ2015、中国国際ポスタービエンナーレ2013など入選。共著に「ロゴデザインの現場-事例で学ぶデザイン技法としてのブランディング」(MdNコーポレーション)

